

## 第3章 コースデザイン

地域の日本語教室の開催方法は、教室の主催者や活動の目的によって様々です。自治体が主催する初期日本語教室における「コースデザイン」は、自治体や地域日本語教育コーディネーターと、指導者が協働して進めます。指導者は、教室を開催する地域の状況や参加者の状況を踏まえたコースの目標が検討できること、また、目標達成のためにコースに組み込む活動の検討ができることなどが大切です。

そのためには、教室内外の状況を把握することだけでなく、どのようなことが初期日本語教室の活動になりうるかや、地域住民が教室に参加、継続しやすくなるためにはどのような工夫ができるかなど、活動を俯瞰的に捉えたり、活動の長期的な見通しが立てられることが必要です。これらは指導者が担当する各回の教室活動の軸になるもので、参加者が教室参加を通して学びや気づきを得られるような具体的な活動内容を考えるうえで欠かせないものだからです。

本章では、「コースデザイン」に必要となる基本的な知識だけでなく、コースデザインをするうえで参考にしたい活動について、具体例と併せて示します。

### 【自己理解チェック】

	読むまえの理解度		読んだあとの理解度
	😞 😓 😊 😄		😞 😓 😊 😄
① 愛知県の学習教材を活用した対話活動を軸とするコースの組み立て方がわかる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
② 対話活動とは異なる活動について理解し、コースデザインに反映させることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
③ 教室を「開かれた教室」とするための具体的な工夫を、教室活動やコースに取り入れることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>



## 3.1 「コースデザイン」の考え方

### 3.1.1 「コースデザイン」とは？

「コースデザイン」とは「そのコースをいったいどのようなコースにするのかを考えること」（日本語教育学会編 1990, p.21）です。もう少し具体的にいえば、**コースの目標を決め、それを実現するための内容と方法を考える**ことです。

これを愛知県の初期日本語教育に置き換えるるとどのようになるでしょうか。まずは「コース」よりも大きい枠組みとして、そもそも初期日本語教育の目的と理念を考えます。

愛知県の初期日本語教育では、①愛知県の外国人住民の一定数を占める、日本語が初期段階の（可能性がある）人が参加できること、②教室活動を通して参加者同士がお互いのことを知り合い、人間関係を築くことを大切にします。そのような日本語教室にするために、仕事や生活の都合で休んでしまっても影響が少ない1回完結型（モジュール型）で、参加者がお互いのことを知り合うことができるトピックの初期日本語教育のための学習教材と、日本語が初期レベルの人でも参加でき、参加者が自分の学びに決定権をもつことができるような活動の流れが示されています。

また、多様な背景をもつ参加者が集まる教室であることから、日本語の知識について統一の「学習項目」<sup>※14</sup>を設けません。学習項目を統一しようと思うと、学習者のこれまでの学習歴や学習してきた内容が異なる場合、活動が難しくなってしまいますが、「**参加者それぞれが自分の学びを選択する**」ことで、**これまでの学習歴が違っても、いま持っている日本語の知識やできることが違っても一緒に活動することができます。**

指導者は上記の目的と理念をしっかりと理解し、既に用意されている教材などのリソースを十分に活用して教室活動に落とし込みます。そして教室を開催する地域や参加者の状況をよく理解し、人間関係の構築や地域とのつながりを意識してトピックを選定して配置します。**そのための工夫が「コースデザイン」になります。**

【表8 コース例】（1コース全8回の場合）

回	内容	備考
1	オリエンテーション、トピック1自己紹介	・必要に応じて時間を長めに設定する。 ・トピック1に取り組みながら、教材の使い方を知る。
2	相互理解のためのトピック（2～28から1つ）	・第2,3回のトピックはあらかじめ決めておくか、初回の様子を見て決定する。
3	相互理解のためのトピック（2～28から1つ）	
4	相互理解のためのトピック（2～28から1つ） 後半のトピック決め	・参加者が活動のスタイルに慣れたら、後半のトピックの希望を取り、（自律学習のためのトピックのAを使用する）、関心の高いトピックを取りあげる。または、参加者の様子を見て、トピックを決める。
5	相互理解のためのトピック（2～28から1つ）	
6	相互理解のためのトピック（2～28から1つ）	
7	相互理解のためのトピック（2～28から1つ）	
8	学びを評価する活動 ※必要に応じて、2回に分けてもよい	・「これまで話したトピックを使ってすこし長い自己紹介をする」など、緊張せずに行えるように工夫する（自律学習のためのトピックB、Cを使用）。 ・コースを通じて自分が学んだことをふりかえる。（自律学習のためのトピックDを使用）。また、これからできるようになりたいことや、参加者ともっと話したいところを考える（自律学習のためのトピックEを使用）。

※14 文型や語彙など、その日に学ぶべきターゲットとして示されるもの

### 3.1.2 コース全体の回数と構成

多くの場合、コースの回数は主催である自治体と地域日本語教育コーディネーターが中心になって決めます。指導者はコースの回数や開催時期が決まった中で、その条件下でよりよいコースになるような微調整を行っていきます。例えば、コースの中盤に地域のイベントなどがあつたら教室活動と絡めた参加を検討したり、コース終盤で学びの成果を発信できる場を設けたりすることが考えられます。

コースとして、開催期間を設けて始まりと終わりを決めることで生まれるメリットとデメリットがあります。メリットは申し込んだり数回参加したものの、継続できなかつた参加者がいても、新しいコースが始まるタイミングで再度参加し始めるきっかけとなる可能性があります。デメリットは終わりが決まっていることで、次のコースが始まるまでの空白期間ができてしまうということです。

日本語が初期段階の大人が1週間に1回の地域日本語教室に通っても、「自立した言語使用者 (B1 ~ B2 レベル)」に至るまでの想定学習時間数<sup>※15</sup>には到底及びません。本人にとっては終わりの見えない努力の道に感じられます。コースを区切って学びの成果をふりかえる機会をつくり、自分の成長を感じることができれば、参加のモチベーションを維持することにもつながると考えます。

### 3.1.3 コースの目標

いっどこで行われるコースであっても、初期日本語教育自体の目的は変わることはありません。その代わりに、教室を開催する地域やそのときどきの参加者の背景などにより**コースごとの目標を逐一検討する必要があります。**

例えばその地域で初めて初期日本語教育を行う場合は、「この教室はレベル分けをして日本語の知識を学ぶための教室ではない」ことや、「日本語の試験対策などを行うのではなく、地域住民同士で交流しながら日本語を身につける場である」ことを、教室参加を通して、参加者にしっかりと理解してもらうことが第一の目標になるでしょう。一方、何度か初期日本語教室を開催している地域であれば、その地域での認知度を高めたり、日本語パートナーの育成、ひいては未来の指導者や地域日本語教育コーディネーターを発掘したりすることをコースの目標にして、毎回の教室には参加できないけれど交流に関心がある人にもゲスト的に参加してもらえよう活動を組み込むことも考えられます。

コースの目標はコースの内容だけでなく、毎回の教室活動の中での声かけや参加者のふりかえり活動にも影響します。主催者である自治体の担当者や地域日本語教育コーディネーターと地域の状況を確認しながら、**今回のコースを開催することで達成したい具体的な目標を立てましょう。**

### 3.1.4 コースデザインの留意点

コースデザインを行う際に気を付けたいことが三つあります。

#### ① 初めて/久しぶりに参加する人がコースのどの段階でも一緒に活動できる工夫

3.1.1 で述べたとおり、愛知県の学習教材は1回完結型 (モジュール型) の教材になっていますが、連続して参加するといろいろなものが積み上がります。それは他の参加者との関係性であったり、特定の回に参加した人たちの中での共通の体験であったりします。忙しくてなかなか参加できず、やっと時間をつくって参加したら自分以外は楽し

※ 15 文化審議会国語分科会 (2022) P.64 【日本語運用能力のレベルと学習時間の目安】 参照

そうに話していて、自分はその内容がわからないとしたらどうでしょうか。そのあと参加する意欲がなくなってしまうかもしれません。参加を重ねて参加者同士が仲良くなることは大切なことですが、それで新しい人や休んでいた人が疎外感を覚えないようにしましょう。

例えば、復習を兼ねて、毎回の活動の冒頭で過去の教材を見ながら話す活動をするとして。そのときに「先週のトピックで話しましょう」と指示するのではなく、「最後に参加したトピックで/これまで一番おもしろかったトピックで話しましょう」と指示するなどの工夫をするだけで、参加者それぞれが自分に合わせた復習をデザインすることができます。

## ②季節や地域のイベント等と関連させた教室活動の企画

季節や地域のイベントと関連させようと思うと、一般的な話題として「お正月の過ごし方」を話したり、地域のイベントを紹介するような活動が思い浮かぶかもしれません。これらの活動は国による習慣、文化の違いへの理解や情報提供に主眼を置いた活動だといえます。このような取り上げ方は「その人個人のエピソード」ではなく、「その国や地域を代表する架空の人物のエピソード」になってしまいます。たまにはそのような活動もよいですが、年末が近い回で「お正月の予定」を話したり、年明けの回で「お正月にしたこと」を話したりすると、「お正月」は文化的な年中行事のイメージから、個人の生活や趣味を表すものになります。

また、地域のイベントに参加したことがない外国人住民にとっては、どのようなイベントなのかという情報よりも、どのような人が参加していて（または参加してもよくて）、参加した人はどのように感じるイベントなのかという情報を聞くほうが、参加してみたいと思うかもしれません。**参加者が住民同士としての意見交換、情報交換、交流ができるような取り上げ方**をすることが重要です。

## ③「ニーズ」の捉え方

言語教育で「ニーズ分析」というと、学習者が「何のために目標言語を学習するのか」（日本語教育学会編 1990, 24）を分析することだと考える人が多いと思います。しかし、自治体主体の初期日本語教育では学習者の個人的な目標や希望に応えることだけが「ニーズ」ではありません。

愛知県は多文化共生施策の枠組みの中で、日本語教育推進法に明記された「地方公共団体の責務」である自治体による地域日本語教育を位置づけています。つまり、自治体による地域日本語教育とは、地域日本語教育に参加することを通して外国人住民が日本語や地域社会のことを知るだけでなく、日本人住民も同じ地域に住む外国人住民への理解を深める場であり、多文化共生の拠点と考えています。自治体による初期日本語教育のニーズとは、**外国人住民のための日本語習得の支援ではなく、「多様な住民が共生する地域づくり」**であるといえます。コースや活動を考える際も、「地域としてのニーズ」を忘れずに、計画、実施することが求められます。

## 3.2 コースデザインのヒント

### 3.2.1 オリエンテーション

コース開始前、またはコースの第1回目ではオリエンテーションを行います。適切なオリエンテーションを行うことで、**教室の内容や方法に共通理解を持ってもらい、参加者が持っている不安の一部を解消し、継続的な参加につながられます。**

例えば、日本語パートナーは日本語の先生であり、学習者は日本語パートナーが教えてくれるのを理解すればよいと思って参加すると、日本語パートナーと学習者の間に「教える・教えられる」という一方的な関係ができてしまうかもしれません。オリエンテーションで、日本語パートナーは対話を通して初期レベルの人とのコミュニケーションの方法を学ぶ立場であることを理解してもらえれば、日本語パートナーも自分の日本語の使い方やコミュニケーションの取り方に意識を向け、学ぶ姿勢を持てるようになるでしょう。

また、初期日本語教室は教室活動を通して参加者同士が知り合い、人間関係を築くことも1つの目的として掲げていることを理解してもらえれば、学習者の日本語の練習に付き合うことが日本語パートナーの役割ではないと理解してもらえます。学習者も日本語パートナーも自分自身のことを伝え合うことで、もっと相手のことを知りたい、もっと自分のことを話したいと思い、自然と教室が一つのコミュニティとして機能し、参加動機を高めることにつながります。



とはいえ、初めて教室に参加した人にとっては、たくさんの情報を言葉で（音声でも、文字でも）伝えられても、すべてを理解することは難しいです。大切なポイントはオリエンテーションの時間に資料を見ながら確認して、それ以外（教材の使い方など）は実際に活動を行いながら、教室活動の最初の1, 2回はオリエンテーション資料も手元に置いて一つ一つ指示を確認して進めていくなどの工夫をして、**参加者に無理のない説明の分量にしたり、優先順位をつけたりしましょう。**

### 3.2.2 学びを評価する活動

参加者の学びを評価する方法として、コース全体の成果の確認をしたり、今後の目標を検討したりする活動が効果的です。

愛知県の初期日本語教育では、日本語能力を客観的に評価すること以上に、本人が自己評価することを重視します。つまり、本人が自分が教室を通して体験したこと、学んだことを思い返して自信をもてたことや、場合によっては過剰に持っていた自信を失って慎重に準備したり行動したりするきっかけを得ることをコースの成果と捉えます。いくつか、参加者の学びを評価するアイデアを示します。

【表9 参加者の学びを評価するアイデアの例】

例	1) これまでの教材を見返す	2) 少し長い自己紹介をする	3) これから話したいトピックを選ぶ
活動	参加した回の教材の「  ふりかえりシート」の「  覚えたいことば」を見返して、覚えているか？どんな話をする中で出てきたか？を話す。	自分が参加した回のトピックの中からいくつかを選んで、いろいろな話題で自分のことを話す。	トピック一覧や教材を見ながら、次のコースで話したいトピックを選び、5～10分のミニ対話活動をする。

目的	<p>①教材の役割をその日のメモにとどめず、教材に書き込むことで学びが整理、記録できることを理解し、教材の重要性を知る。</p> <p>②自分にとって「覚えたい／必要だ」と思ったことばがどのようなものだったかを思い返すことで、自分はどのようなことばや表現を学びたいと思っているのかを考える。</p>	<p>①以前話したトピックの中から自分で選んだトピックでもう一度話すことで、自分にとって大切な話題で自分のことを話す力を養成する。</p> <p>②参加者同士で改めて自己紹介するなかで、コースの始めよりもお互いのことを知ることができたことを実感する。</p>	<p>①次回コースの開催が決定している場合、参加意欲を高める。</p> <p>②トピックからミニ対話を体験することで、体験したことがない話題について、自分が日本語でどのようなことが話せるかを想像し、自信がなかったり準備が必要なことを想定する力を養成する。</p>
----	---	---	---

### 3.2.3 「行動・体験型活動」の取り入れ方

愛知県の初期日本語教育で想定する対象者の中には、「生活上の行為」<sup>※16</sup> や「生活 Can do」<sup>※17</sup> のうち日常的なもの（「ごみ捨てのルール」や「買い物場面での日本語」）も難しいという人もいれば、日本には長く住んでいるけれども、日本語を使う機会が少なかったり、ごく限られた日本語使用で事足りていたため、日常的な生活の範囲のことは問題なくできるという人もいます。そのような人にとっては、日常的な行為を取り上げた行動・体験型の活動は自分には必要ないと感じられるかもしれません。しかし、同じ「生活上の行為」でも、「医療」や「災害への備え」などは非日常的な内容であること、命に関わる内容であることから、関心を引きやすいと考えられます。

普段の対話活動の中に、特別活動として「行動・体験型活動」を取り入れることで、対話活動だけでは扱うことができない言語表現に触れる機会をつくったり、実際の場面で行動するための知識を獲得したりすることができます。「行動・体験型活動」を取り入れるアイデアを二つ示します。

【表 10 「行動・体験型活動」を取り入れるアイデアの例】

例	1) トピック：医療	2) トピック：税金
活動	地域の病院や医療センターに協力してもらい、医師に模擬診察をしてもらう。 <sup>※18</sup>	納税に関する市町村の出前講座を受ける。 <sup>※19</sup>
目的	<p>①医師とのやりとりを通して、問診での応答を体験する</p> <p>②医師や医療機関が外国人住民の日本語使用の様子を知ることで、今後患者として来院したときの対応を想定してもらおう第一歩とする。</p> <p>(+α) 日本人住民が医師と外国人住民の模擬診察の様子を見ることで、普段の日本語教室でのやりとりと比較し、自分の日本語使用やコミュニケーション上の歩み寄りをふりかえるヒントとする</p>	<p>①市町村の担当者による税金に関する簡単な講座を聞いて、納税書の見方や納税の方法を理解する。</p> <p>②市町村の多文化共生／日本語教育担当者以外の職員に外国人住民との密なコミュニケーションを体験してもらうことで、庁内での理解を促進する。</p>

※ 16 文化審議会国語分科会（2010）「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について」で示された日本で社会の一員として生活するうえで行う可能性のある行為の事例。

※ 17 「生活 Can do」は、国内に在住する外国人（「生活者としての外国人」）が日常生活の様々な場面において、日本語で行うことが想定される言語活動を例として示した生活分野における言語能力記述文（Can do）です。（文部科学省（更新日不明）「日本語教育の参照枠」より）

※ 18 生活上の行為：Ⅰ健康・安全に暮らす  
生活 Can do：かかりつけの病院での診察のとき、体のどこがどのくらい、いつごろから痛いかなどの自分の体調や症状に関する簡単な質問に対して、短い簡単な言葉で答えることができる。

※ 19 生活上の行為：Ⅷ社会の一員になる  
生活 Can do：役所の窓口で担当者に、税金はどこで支払えるのか、現金払いやクレジットカード払い、口座振替などどのような方法があるのかについて質問し、いくつかの簡単な答えを理解することができる。

例	1) トピック：医療	2) トピック：税金
留意点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人住民自身または家族のよくある症状（持病や風邪など）を想定して模擬診察をする。全員が共通の症状で行う必要はない。</li> <li>・医師や医療機関の負担に配慮した活動を計画する。拘束時間を最小限にしたり、模擬診察を行う人数を限定したりすることも検討する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料はできるだけ文字以外の視覚的な情報をもとに作成してもらう。</li> <li>・初期レベルの学習者がわからないまま聞いている時間が長ならないように工夫する。長時間、一方的に話を聞く活動は初期レベルの学習者には難しすぎる。</li> </ul> <p>[数分の説明] → [ペアまたはグループで理解の確認を行う時間] → [数分の説明] …</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講座の前に、トピックや講座内容に関係する経験があるかどうか話す時間をとると、イメージがわいて理解しやすくなる。</li> </ul> <p>講座に入る前に納税書を見たことがあるか、いつもどのように税金を払っているかなどをペアまたはグループで話す など</p>

### 3.2.4 開かれた教室のためのコースデザイン

「開かれた教室」とは、関心をもった誰もが参加できる教室、参加はしなくとも存在が認知されている教室、またそれを目指して工夫をしている教室のことを指しています。

**日本語教室は地域社会から切り出した「特別な場」ではなく、教室自体が一つの小さな地域社会**です。教室を訓練の場、練習の場と位置づけてしまうと、「自立した言語使用者」にならなければ地域社会に出られないという誤解を生んでしまいます。

日本語の「自立した言語使用者」であること、つまり、一定の日本語能力を身につけているということは、間違えずに、どんなことでも、問題なくできるという意味ではありません。ときには「自分の言いたかったことを類似の意味を持つ表現を使って言い換え」<sup>※20</sup>たり、コミュニケーションが失敗したときに「別の方略を用いて出直すことができ」<sup>※21</sup>たりすることで、相手とコミュニケーションを行う能力があるということです。

愛知県の対話型初期日本語教室で日本語パートナーの参加と学びを教室の目的と掲げている理由はここにあります。上記のようなコミュニケーションは、日本語学習者の努力だけでは成り立ちません。言いたいことがうまく言えないとき、**協力的に、ともにコミュニケーションを成り立たせるパートナーとなることができる人が地域社会にたくさんいることは、多文化共生社会の実現には欠かせません。**このことから、教室がいろいろな人にとって参加しやすい場になり、一人でも多くの人々が日本語を介した多様なコミュニケーションの機会を知る、体験することは対話型初期日本語教室の重要なミッションの一つです。そして、そのために、対話型初期日本語教室は「開かれた教室」となるように工夫をしなければなりません。

「開かれた教室」であるためには様々な工夫ができますが、コースデザインもその工夫の一つです。「閉じた教室」に感じられてしまう事例を示します。

#### (1) コース始めからの「積み重ね」がないと参加できないコースデザイン

対話のためのトピックは話題を広げることができるものもありますが、基本的にはどれも絵や写真を見せることで初期レベルから対話ができます。トピック一覧の番号が大きいトピックのほうが難しいというわけではありません。**「トピック」に困難度を結び付けず、「トピック」を出発点に様々な日本語レベルの人が対話できるような進進行を心がけましょう。**

※20 「産出的言語活動の方略についての言語能力記述文、[補償]、B1.2」（文化審議会国語分科会（2021）『日本語教育の参照枠』、P.50）

※21 「産出的言語活動の方略についての言語能力記述文、[モニタリングと修正]、B1.1」（文化審議会国語分科会（2021）『日本語教育の参照枠』、P.50）

継続的な参加者はそれまでの参加の中でお互いに関する情報も少しわかってきて、日本語の獲得も進むため、自然と話題が広がっていくこともあります。それは対話のペアやグループで調整するようにして、どのトピックを扱うときでも、新規参加者や初期レベルの学習者が対話ができるようなモデル提示をします。その場にいる参加者全員が、その日の学びが得られるように活動や指示を調整するのも指導者の重要な役割です(2.3『対話型初期日本語教室』における指導者の役割)参照)。

## (2) 関心を持っていない人には情報が届かない

日本語教室に参加していると、楽しく意義のある活動であるのに対して知名度や認知度が低いと感じられるときがあります。それは、「日本語教室」に関心を持ってアンテナを張らないと情報が得にくく、参加するほどの関心を持っていない層には情報を届ける余地がないからです。参加につながればなおよいですが、**まずは参加しなくても自分の地域に日本語教室があることを知っている人を増やし、未来の参加者を増やす**ことを目指します。そのためには指導者としてできることと、地域日本語教育コーディネーターや主催者がすべきことがあります。ここでは指導者としてできることを述べます。

指導者としてできることは二つあります。

まずは物理的に教室を開放することです。日本語教室を公的な施設で行っていると、別の用事で訪れた人が会場の前をとおることもあります。実際の活動の様子から、チラシでは伝わらない雰囲気や魅力が伝わることもあります。活動中の声が周囲の迷惑にならないかということに注意しつつ、ドアを開放したり部屋の外に看板を出したりして、たまたまそこを通った人でも、**関心がある人がちょっと覗くことができるような雰囲気**を保ちましょう。

次に、自治体の広報誌やSNSに掲載してもらったり、公的施設に成果物等を掲示することで、教室の様子を間接的に発信することです。会場の施設に掲示スペースがあったらそこに教室活動で作成したミニポスターなどを掲示させてもらったり、連携できる公的施設で掲示させてもらったりすると、より多くの人目に触れます。また、広報誌の特集記事や、事業報告、SNSへの投稿などを行うと、**参加にまではつながらなくとも、日本語教室が開催されていることを広く住民に知ってもらう**ことができます。

## (3) 自治体庁内で担当部署以外は外国人住民や日本語教室のことを知らない

自治体に多文化共生や日本語教育事業の担当部署があるということは、取組みを進める体制がとれていると言える反面、担当ではない部署はいわゆる”縦割り”の感覚で、自分たちも多様な背景の住民に行政サービスを届ける立場であるという意識が低くなってしまいう可能性があります。しかし、日本語教室のコースデザイン次第で、この意識を変えるきっかけをつくることができます。

例えば、地域日本語教育では、3.2.3の例2)のように、その内容、分野の専門家から話を聞くことができます。このとき、教室としては指導者や日本語パートナーでは説明できない正しい情報を伝えることができるというメリットがあります。講師(専門家)の側には、自分たちだけでは情報を伝えにくい人へ情報を伝える場をもったり、伝え方の工夫を学んだりすることができるというメリットがあります。教室外の人を教室に招き入れることで、教室にとって有益であるだけでなく、普段、外国人住民と関わりを持ちにくい人との接点にもなることができます。

ここで指導者に求められるのは**教室活動として成り立つように調整をすること、それから講師(専門家)に過度な負担とならないように調整をすること**です。

指導者は普段、教室活動を行っている立場から、どのような説明なら参加者に伝わるか、伝わらなかったらどうすればよいかということの知見があります。これはどの参加者に対しても有効な場合もあれば、今回のコースに参加している特定の参加者に対してのみ有効な場合もあります。それを見極めながら、講師(専門家)と打ち合わせを行い、当日の資料や話の流れ、内容のボリュームなどを調整します。

その一方で、講師(専門家)が過度な負担を感じないように配慮することも大切です。教室の参加者が毎週の

活動を通して少しずつ学んだり変わったりしていくのと同様、すべての人の学びはすぐに理想の形になるわけではありません。一度に求めすぎて「あの教室との協働は大変だ」と思われたり、距離を置かれてしまっては本末転倒です。少しずつ内容を変えて毎年来てもらったり、担当者が変わるときに引き継ぎをしてもらう中で、だんだん相手や相手の組織の中で多様な住民がいる地域での情報発信についての工夫を考えてもらうことのほうがずっと大きな波及効果を生みます。指導者には長くいろいろな人に関わってもらえるような視点も必要となります。

これらのことは指導者だけでは難しいこともあるので、常に地域日本語教育コーディネーターや自治体担当者と一緒に取り組むことが重要です。